

横浜市立奈良中学校 令和5年度 学校評価報告書

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	<ul style="list-style-type: none"> 校内で研究授業を行い、生徒が主体的、対話的で深い学びが行えるように授業改善に取り組みます。 授業におけるICT機器の活用を継続的に行い、「協働的な学び」の実践を目指します。 指導と評価の一体化に取り組み、特に「主体的に学習に取り組む態度」の評価について明確な基準を提示できるよう取り組みます。 	<ul style="list-style-type: none"> 年2回の研究授業を行ったが、教員同士が見合う機会は十分ではなかった。 ICT機器の活用は以前よりも増えているが、より有効に活用できるような工夫が必要と感じた。 主体的に学習に取り組む態度の評価については職員の見解も深まり、明確な基準をもって評価をしているように感じた。 	B
豊かな心の育成	<p>道徳の授業をはじめ、各教科において話し合い活動を中心とした授業づくりを行うことを通して、他の人の考えや気持ちを想像したり、自分の考えや気持ちを伝え合い、わかり合うためのコミュニケーションに取り組んだりすることで、他の人との人間関係を調整する力を養い、他者の思いに寄り添う心を育みます。</p>	<p>生徒一人ひとりが自分の考えをもち、その考えを伝え合ったり、ワークシートを活用したりする授業を行い、生徒の道徳的見方・考え方を広げるとともに、自己を見つめさせる機会としたが、実際の生活に活用する点では課題が残った。教科書や道徳教材を計画的に活用し、ローテーション道徳を行って、教師が同じ題材を複数回扱うことで授業内容の改善を図った。お互いの授業を見学するなどして授業力を高めることについては課題が残った。</p>	B
健やかな体の育成	<ul style="list-style-type: none"> 1校1実践運動として、昼休みに積極的に体を動かす習慣を推進します。 全校生徒が健康に学校生活を送るために、校内の課題を見つめ、それを解決するための手立てとなる事項を調べ、学校保健委員会や保健だより、食育だより等で発信します。 	<ul style="list-style-type: none"> 昼休みに級友らと楽しみながら、体を動かす生徒が多くみられる。今後も声掛けなどをしていきたい。 学校保健委員会では「食」をテーマに朝食の大切さや栄養のある朝食を考え、実際に調理した。その内容をICTや保健、食育だより等で全校や保護者に発信し、健康について関心を高めることができた。 	B
自分づくり教育 (キャリア教育)	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の自己理解を促し、より良い自己の生き方について考え、自ら選択・決定する力を育成します。 職業講話や職場体験を通して、職業についての理解や地域社会への所属意識を高めます。また事前事後学習や振り返りを行い、自己の将来を考える機会を設定します。 進路学習では、情報を積極的に発信し、かつ適切な助言を通して、生徒一人ひとりの進路選択や自己実現に向けて必要な能力や態度の育成に努めます。 	<ul style="list-style-type: none"> 公立高校の出願方法の変更、評価材料の見直しもあり、対応に追われることとなった。システムが安定することで、次年度以降はもう少しスムーズな進路指導を進めることができると感じる。 職場体験の再開は以前のデータが乏しく、準備に多くの時間を費やすこととなったが、生徒にとっては貴重な体験になり、地域との関りを感じる良い機会となった。 	B
いじめへの対応	<p>いじめの起きにくい風土づくりに邁進します。そのために起きない、起こさない努力、工夫をしていく。またいじめに対する認識力や、対応力を培い、いじめが発生した時には、迅速かつ丁寧に対応します。またいじめは絶対に許されないという共通理解をもち、毅然と対応します。また必要に応じて、外部機関と連携して対応します。</p>	<p>毎月の生活アンケート、いじめアンケート、教育相談、保護者や生徒との日々の関係構築など様々な場面で早期発見・早期対応を組織として行うことができた。また、外部機関との連携も積極的に行った。今後はいじめの起きない、起こさない、努力工夫をより積極的に行っていきたい。</p>	B
人材育成 組織運営(働き方)	<ul style="list-style-type: none"> 教職員一人ひとりの力量の向上と個人の強みを活かした主体的でチーム力を最大限に発揮できる教職員集団を育成します。 対話を通して教職員の考えや想いの受容に努め、意欲喚起を図ります。 教員間で指導法を共有できるようにし、OJTを中心とした組織的な人材育成に努めます。 「報告・連絡・相談」体制が確立した風通しの良い職場づくりと全教職員参加型の組織運営に努めます。 	<p>年度を通して、情報共有をはじめ、「報告・連絡・相談」を落とさないように、継続して声を掛け合いながら取り組む雰囲気作りを行っている。経験の浅い職員が増え、授業や指導方法の共有や先輩教諭からのアドバイスなどメンターチームとしての機能が高まってきている。来年度へ向け、全職員で互いを受容できる関係作りや雰囲気作りを大事にしていきたい。</p>	B
特別支援教育	<p>不登校生徒や、特別な支援を必要とする生徒を対象に、スクールカウンセラーや関係諸機関との連携を図りながら、全職員で組織的に支援します。また、横浜プログラムを活用した生徒理解、学級指導の推進や特別支援教室の効果的な活用、横浜どこでもスタディの推進を行います。</p>	<p>外部機関をはじめ関係各所との連携を適切に行った。また、指導主事を年2回招いて、横浜プログラム活用研修を行い、実施意義や分析の仕方、支援策の検討、プログラム実施と職員全体の意識を高め、共通理解を図ることができた。</p>	B
地域連携	<p>学地連総会、保護者懇談会等の機会を活用し保護者、地域とのさらなる連携を図ります。また奈良ふれあいフェスティバルの企画、運営を通じて、地域と中学生の世代間を越えた交流を図ります。登下校や祭礼パトロールを実施し、地域で生活する生徒との交流や安全に対する啓発を促進します。</p>	<p>学地連総会、地区パトロール、奈良ふれあいフェスティバル、3月実施の地域清掃など、4年振りに多くの地域行事が戻ってきた。コロナ禍が明けた形態や関わりということで来年度以降も今の時代に合った連携、協力を推進していきたい。</p>	B
ブロック内 評価後の 気付き	<p>今年度もまだ、児童生徒の対面での交流は全体としては実施できなかった。職員間では、毎年5月に行っているブロック内の小学校旧6年生担当の中1授業見学とその後の意見交換会は生徒の共通理解につながり大変有効であり、生徒理解に活用する事ができた。夏季休業明けに職員の合同授業研を中学校で行えた。小学校の先生に授業を見ていただく機会であり、テーマにはICT活用を組み込んだが、実線は少なく来年度につなげていきたいと考える。後期は生徒間の交流が全体ではないが行うことができた。学校運営協議会や小中教務主任会、小中児童生徒専任会などでの話を深め、職員間の研究を含め、児童生徒間の活動など、引き続き、より一層の小中連携に努めたい。</p>		
学校関係者 評価	<p>9年間で育てる子ども像の実現に向け、ブロックのテーマである「豊かなコミュニケーション」について学校評価共通項目を設定し、その学校評価結果と授業参観の様子から評価をいただいた。各学校でコミュニケーションを大事にして取り組んでいる。授業では、子どもが座って先生の話を聞くのではなく、先生と子ども、子ども同士で対話をしながら授業が進められている。子どもが意見を出すと、他の子が「いいと思う」などと返して、相手に受け止めてもらいながら授業をしていることが伝わってくる。各校で国語などを通して、発信できる子になってほしい。不登校が増えていく中、子どもの居場所が大事という各学校の姿勢が良い。9年間で子どもを育てると意識のもと取り組むことができていると実感している。学校と家庭が協力し合うために、さらに学校の取組を発信してほしい。</p>		
中期取組 目標 振り返り	<p>コロナ禍が明け、教育活動の範囲を校外、地域へと広げることができた。様々な活動を通して思いや考えを伝え合い、他者との関わりを深めようとする姿勢が見られ、生徒、保護者ともにコミュニケーション力の向上を実感することができている。重点取組目標として掲げていたYP支援検討会を2回開催し生徒一人ひとりの変容をとらえながら組織的に生徒理解を深めることができた。また、不登校生徒の割合が多いという本校の継続課題の解決に向け、後期からは月1回YPを実践しながら温かい学級風土作りに取り組んだ。来年度は市学力学習状況調査の分析を組織的に行う中で本校生徒の良さや課題について改めて見つめ直していきたい。</p>		